第3回鹿児島県児童クラブ連絡協議会
2010年3月14日
新年度を控えての指導員研修会

幼い子どもの保育・子育てから見える

子どもたちと親たちの今を考える

～『新版　かごしま子ども白書』から～

黒川久美（鹿児島子ども研究センター所員）

『新版　かごしま子ども白書
―みつめる、みとおす，つながる―』

南方新社　2009年12月刊行

第1部　みつめる―かごしまの子ども・子育て最前線
　１、子どもたちの「今」、まずありのままを知ろう
　２、親と子の生活・文化聞き取り調査
　３、南さつま市における２地区の学校統廃合
第2部　みとおす―子ども・子育て・教育の今を読み解く
　１、子ども・青年の生きづらさに向き合う
　９、幼い子どもの保育・子育てを考える
　11、子どもの貧困に向き合うために
　12、武岡児童クラブでの学童保育
　【コラム⑥】学童保育の現状
　16、「競い合い」をなくすことから始めよう
第3部　つながる―子育て・教育に希望の風を
　１、弱さを抱えた子どもの家庭支援
　２、友との関わり合いで築く、「いのち」の学び
　３、私たちの願い―子どもからおとなまで　輝かせたいライフステージ

1 「子どもの貧困」問題から見えてくるもの

- 「子どもの貧困」の拡がりとその影響
  ▲子どもの貧困率；14％（7人に1人）

- どう考える、親の責任
  ▲子ども・子育て問題も貧困の問題も、親の努力や責任の問題ととらえる風潮
  △『子どもの権利条約』第18条「親の第1次的養育責任と国の援助」＝“親が責任を果たせるように”国の社会的施策・援助が必要なのだ

２－①
今　問われている　子ども理解

◆「気になる子ども」が増えている

▼1990年代後半頃から

　落ち着きのない子、会話が成立せず一方通行、「死ね」など乱暴な言葉、友だちとの関係がうまくつくれない子、気に入らないことがあると些細なことでパニック、攻撃的、大人ののぞむ「よい子」を演じる、自分の非を認めたがらない、甘え下手、保育者にベタベタ甘える・・・

２－②
今　問われている　子ども理解

◆子どもをどう理解し、どう向き合うか

○「気になる」姿・行動を通して、子どもは何を訴えているのか。

行動の背後にある、そうせざるを得ない子どもの思いや葛藤、理由を探り、本当の願いをとらえようとすること。＝子どもの内面に目を向けること。

◎認めてほしい、無条件に愛してほしい、ありのままの自分を受け止めてほしいという切実な願い

２－③今問われている子ども理解
（その１）　平松実践から

平松友子さん（名古屋市・けやきの木保育園園長）
の実践記録から

≪本当の気持ちにたどりつくまで―揺さぶられる「子どもの最善の利益」≫（『現代と保育』72号2008）

☆親子の生きる現実を見つめ、「子ども理解」を探り続ける

●どの子も「安心して育つ」権利を保障する

嫌だけど笑っている、嬉しいけど喜べない、どんな感情も怒りになって表れる、そういう子どもが園にきて安心できるように、そして徐々に人間らしい感情を出せるようにしていくこと＝これも「セーフティネット」としての保育園の役割（平松）

２－③今問われている子ども理解
（その２）　平松実践から

≪甘えさせ直しの保育≫

…寄り添っても、受け止めようとしても、まるで核心から逃げるように暴れるのはなぜなのか？

ちょっと前までの実践では、荒れる子がいれば現象面をとらえるのでなく、その子の本当の気持ちに思いを寄せ、「～だったの？」「それは悲しかったね」と受け止めをし、その子の居場所が集団の中にできると（または保育者が心の支えになると）それが安心感になり、“荒れ”ではなく、“言葉での伝え”に変化していった。しかし、今はそんな単純なものではなくなった気がしている。受け止められてもぴったりと身も心もゆだねるような行為が感じられない。いくら本音を引き出して共感しても、聞く耳をふさぎ「ばかーっ」「みんないなくなれっ！」と関係のない友だちや物に八つ当たりをする、もしくはすねる・ふさぎこむ・何もなかったかのようにふらふらとその場を離れる

２－③今問われている子ども理解
（その３）　平松実践から

そんな姿を見ていると、人と心を通わせわかり合うことを、はじめから「できっこない」とあきらめるような、悲しくなるほどの不安感を感じる。
“子どもは大人に依存しつつ育つ”、そんな基本の甘えることすら「遠慮をしている子」「小さくても大人の顔色を気にしてふるまう子」と出会い、保育に求められていることが大きく変わってきているのを感じている。
甘えたいけれどがまんしていることが小さな時から恒常化して育ったら？ならば安心感の基盤となる“甘えさせ直し”をしようと職員で意思統一をした。

２－③今問われている子ども理解
（その４）　平松実践から

≪底なしの不安感≫

そこで、現場では子どもと大人との関わりを密にし、頑張らせないで甘えられる信頼関係を育もうとするのだが、その子とじっくり1対1で遊んだりする時間をとっても、集団の中に戻ると、とたんに心がとがる感じである。この底なしの不安感・自己否定感はどこからくるのか？背景分析すれば、子どもたちが現代の世情を重く背負っていることが見えてくる。…多くの親が超長時間労働であったり、派遣労働などの不安定雇用だったりする。各クラスに単親家庭も複数いる。生活保護を受けながら子育てに奮闘している家庭もいる。

２－③今問われている子ども理解
（その５）　平松実践から

≪大人だって安心したい≫
朝早くから夜まで保育していると、子育て世代のなんと忙しいことか。一番家庭でゆったりと過ごしたいはずの子育てをしている人たちが、朝早くから深夜まで働いていることの矛盾。若い職員に「それでもプロか！」と些細なことでどなったお父さんは、実は職場を変わらざるをえなくなった日の荒れた姿だった。朝ごはんを食べてこない家の理由は、親の手抜きではなく「朝食を買う生活費がない」というものだった。うつ病の母…。保育園の役割も“家族支援”“生活支援”の色合いが濃くなってきている昨今。…

２－③今問われている子ども理解
（その６）　平松実践から学ぶこと

☆平松実践における「子ども理解」のポイント（田中孝彦）

- 子どもの不安定な姿の土台にある、親・家庭の生活の事実と、その背景にある社会の問題の直視。それとの関係で、ネガティブに見える子どもの姿も、理由のあることとして理解する。
- どんなあなたも全部大好きだよと愛されている実感をどの子にも保障する
- 友だちの中で、「絶対大丈夫だからという経験を積み重ねていくこと。
- 傷を負いながら、傷つけ合いながら、気遣い合っている子どもと親の「出会い直し」を支えていくこと。
- 今日の社会の中で傷つきながら子育てをしている親たちを支えていく、共同的実践の模索。

３－①子どもとどう向き合うか

- 「幼さが正当に理解される生活」が失われてきており、「幼いモタモタを大目にみる」「できなくても当たり前」というような目で幼児を見る余裕が大人になくなっているのではないか、という指摘がある。

  大人のペースで「ちゃんとできるように」「はやく、はやく」と追い立てられる日常は幼い子どもにとって失敗体験の連続ということになるだろう。忙しい大人はゆっくり子どものリズムに合わせて子どもにつきあうことができず、子どもへの共感も貧しいものになってしまう。

３－②子どもとどう向き合うか

- 他者と比較し、一歩でも先にとせきたて競い合う、過熱する早期教育、競争社会に生き残るための「強さ」志向、親責任論の強まりの中で「いい親」になることへのプレッシャー、人に頼れない・頼らない孤独な子育て。
- さらには長時間過密労働、生活の多忙化、将来への生活不安、そして貧困…。
- こうした様々な問題が複合的に絡んで子育ての困難が増大し、子どもたちの内面の育ちに深刻な影響を及ぼしている。

３－③子どもとどう向き合うか

- 子どもの心に自己肯定感（＝自分のことを好きになる感覚）を育てることが幼い子どもの子育て・保育においても最重要課題の一つになっている。
- 自己肯定感がないと、安心して自分に頼ることができず、自信がもてず、主体的に生きることができなくなってしまう。自己肯定感は、自分が無条件に大事にされたと実感できる体験を積み重ねていく中で育まれていく。例えば、大きな犬に怯えたときに、「大きいね、怖いね」と自分のありのままの感情を大人に受けとめてもらい共感してもらえたというような共感の経験（自己安定感）。さらに、子ども自身が手ごたえを感じたことを大人も見てくれて、きちんと評価してもらえたといった経験（自己充実感）。
- 日常生活の中にある一見見過ごしてしまいそうな何気ない子どもの姿に大人が共感のまなざしを向けることが求められているともいえよう。

４－①今こそ　子育ての共同を

■「気になる親」が増えている

“困った親”は“困っている親”

- 親たちが表す様々な姿の背後にある生活や労働の実態を知り、そこでの思いをわかろうとすることが大事だということ。背後には保育者の思いもかけなかったことが隠されていたりする。
- 「あの親は…」と個々の親の問題としていたことが実は今日の社会に共通する諸矛盾の中で生み出されたものであるということに気づいていくと、親へのまなざしが変わってくるのでは。そして親の思いを聴きとろうとする姿勢は対立から共同への第一歩になっていくはず。

■「気になる保育者」も増えている

４－②今こそ　子育ての共同を

☆生活にゆとりを　子育てに共同を☆

◆「砂漠化」した子育ての大地にどう潤いを回復させていったらいいか。幼児が幼児として大事にされるためには、大人たち（＝親や保育者）に、時間的、精神的、経済的な余裕が必要。人間としてあたりまえのゆとりある生活が取り戻されなくてはならない。そのためには、家族的責任を果たすための労働時間の短縮など労働政策や子育てへの経済的支援など包括的で総合的な政策が不可欠。

４－③今こそ　子育ての共同を

☆生活にゆとりを　子育てに共同を☆

◆それとともに大人たちが子どもをまん中にしてつながり合い・支え合い・育ち合う関係＝「子育ての共同」が創り出されていくことが求められている。「人間は困難を前にすると、まわりの人とつながらざるを得ない。したがって子育てのためのネットワークづくりが不可欠の時代になった。多くの人びとと結びつき、力を合わせて困難を乗り越えていくことに人生の醍醐味がある。『息苦しい』状況そのものの中に、同時に豊かな人生をつくる可能性が秘められている。」（増山均氏）この指摘をじっくり噛みしめたいもの。

５　保育・子育ては「国・自治体が公的責任を負う」という声を

●公的保育制度が危ない

「新保育制度案」（2009年2月）☛現時点でも基本方向変化なし

最大の問題点＝市町村が保育を提供する責任をなくし、親（保護者）と保育所が直接契約する方式を導入する点／応益負担になる点

●保育・子育ては社会全体が支える

保育者たちも親たちもそして子どもたちもみな「生きづらさ」を抱え込まされている。今、それぞれの「生きづらさ」の社会的背景が共通していることがある意味「見えやすく」なってきている。今こそ、「生きづらさ」を強いる社会に抗い、子どもたちが安心して育ち、誰もが人間らしく生きることのできる地域・社会の創造に向けて、親たち、保育者たち、子どもに関わるすべての大人たちがつながり合って「子育ての共同」を広げるチャンスの時といえるのではないか。そして保育・子育ては「社会全体が支える」すなわち「国・自治体が公的責任を負う」という声をもっと大きくしていきたいもの。